

# MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN  
tel:+81-(0)3-6450-2334 fax:+81-(0)3-6450-2335  
www.misashin.com info@misashin.com

プレスリリース  
2022年3月

## 崔在銀 Jae Eun Choi *The Oldest Story of Today ...*

2022年4月8日(金) - 5月28日(土)  
開廊時間：火-土(日月祝休) 12:00-19:00

MISA SHIN GALLERYは、4月8日(金)から5月28日(土)まで、崔在銀による個展「The Oldest Story of Today ...」を開催いたします。

「The Oldest Story of Today は崔在銀の世界観を圧縮したものと言える。 災難と戦争の時間を生きているわたしたちの今日を、今日以外に何と呼ぶのだろうか？ 今日はまだ私たちに与えられているものであり、それと同時に永遠に到来するものでもある。それは塩のように生々しく、吹き散らされる灰のように何も残さない。この『今日』は皆の記憶の中に刻まれるだろう。」

—ジンサン・ユウのテキストから

生命の循環や時間をテーマに制作を続けている崔の新作インスタレーションは、塩と灰、そして鹿、それらの上を流れる空の写真作品、小さな雫の落ちる音で構成され、太古から続く時間と生命の無限の廻転からなる物語を、叙事詩的な構成で静かに浮かび上がらせませす。

床に小高く積み上げられた塩の一部は灰に覆われ、金色の脚を持つ鹿の彫刻が一頭配置されています。人間が生きていく上で欠かせない塩は、古代文明では金と同等に取引され、塩の権利争いや塩税は戦争や革命の引き金となってきました。塩の歴史は人類の歴史でもあり、さらに日本では盛り塩やお清めなど宗教的な風習にも用いられます。一方、その塩の上に撒かれた灰は、炎によって崩壊し、再び戻ることなく保存もされない幾多の犠牲に対する、失われた記憶を呼び起こします。

日本をはじめとする世界各地の神話に登場する鹿は、神的存在としてまた霊的な媒介者として描かれますが、ギリシャ神話では神の存在を盗み見た罰として鹿に変えられたアクタイオンが知られています。金色に染まった脚は、見てはならないものを見た罪で罰を受けた犠牲者として、その原罪的な視線を通じて姿を現した、世界と自然の秘密を象徴しています。

# MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN

tel:+81-(0)3-6450-2334 fax:+81-(0)3-6450-2335

www.misashin.com info@misashin.com

崔は2011年4月にイタリアプーリア州にある、海辺のオリーブ園で1日24時間、1分に1カットずつ、計1440カットの空の写真を撮影するPuglia Sky Projectを行いました。本インスタレーションではそのプロジェクトから、日没と夜明けにそれぞれ9分間に渡り刻々と変化していく空を撮影した計18枚の写真が並びます。東西を海で囲まれ、多くの民族や権力者から支配されてきた長い歴史を持つプーリア州の村において撮影された一連の写真は、宇宙の変わらぬサイクルとその下で異なる時を生きる我々の時間が対比されるのです。

宇宙の時間軸の中で、刹那に過ぎない生きとし生けるものの時間の循環と共有を独自の言葉で提示する本インスタレーションは、人間の辿ってきた道、現在の社会や世界の状況など様々なことに思いを巡らせるきっかけになるのではないのでしょうか。

MISA SHIN GALLERYで2017年以来となる崔在銀の個展、ぜひご期待ください。

## 崔在銀 Jae Eun Choi

草月流終了後、三代目家元、勅使河原宏のアシスタントとして数々のインスタレーションや、映画「利休」の制作に携わり、80年代から生命や時間をテーマに作品を発表している。1986年に草月プラザ イサムノグチ彫刻ガーデン「天国」の空間において、土のインスタレーション「Earth」を発表。1993年 大田国際博覧会 Expo'93 (韓国、テジョン) において政府パビリオンRecycle Art Pavilionをデザイン。同年、ユネスコパリ本部ピアツァ広場で行われたパリ大茶会で 安藤忠雄、シャルロット・ペリアン、エッソーレ・ソットサスらとお茶室「Une surrender lune (もう一つの月)」を発表する。1996年-2000年、ソン Chol 僧侶 (Grand Master Seongcheol) の舍利塔をデザイン(韓国、海印寺)。2000年 ドキュメンタリー映画「On The Way」を制作。91年サンパウロ・ビエンナーレ、95年には日本代表の1人として第46回ヴェネチア ビエンナーレに参加、2016年に第15回ヴェネチア建築ビエンナーレに出品するなど国際展への参加多数。主な個展として、「ルーシーと彼女の時間」サムソンロダンギャラリー (ソウル 2007年)、「アショカの森」原美術館 (東京 2010年)、プラハ国立ギャラリー (2014年)、「The Nature Rules 自然国家 : Dreaming of Earth Project」(原美術館、東京、2019) など。進行中のプロジェクトには1986年に開始し、世界7カ国に和紙を埋めたのち時を経て掘り起こす、時間を表すプロジェクト「World Underground Project」の他、2014年に立ち上げた韓国のDMZ(Demilitarized Zone : 非武装地帯)での「Dreaming of Earth Project (夢の庭園)」の延長線で、破壊された森を復元させる計画に取り組んでいる。

お問い合わせ : info@misashin.com Tel: 03-6450-2334

# MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN  
tel:+81-(0)3-6450-2334 fax:+81-(0)3-6450-2335  
www.misashin.com info@misashin.com

崔在銀

## **The Oldest Story of Today**

ユウ・ジンサン (キュレーター、美術評論家)

時は未来から来る。過去の時間は再び未来に流れ込み、狭い水路に沿って現在という井戸にしばらく留まった後、再び遠い道を回って未来に流れていく。時間が過去に流れていると信じることは、それが二度と遭遇できない未知の深淵に向かって消えていくという幻想のようだ。砂漠があるだけ、草原があるだけだ。砂漠と草原では、砂利と砂、名前を知らない草があちこちに運ばれ、その上に吹く風の方向が変わるだけで、そこから流れる川の水は自分が通ってきた道をまた通り過ぎるだろう。世界は未来に属し、過去は未来につながる交差点に過ぎない。

崔在銀は時間の循環をテーマに制作してきた。「World Underground Project」から「ルーシーと彼女の時間」、韓国のDMZ地域で行っている「Dreaming of Earth Project 夢の庭園」、そして「The Nature Rules 自然国家」に至るまで、崔の作品に共通しているのは世界中のすべての存在が共有している、大気のような時間である。人間は世代という名で時間の一定の時点を共有する。たったひとつの世代だけがその地点にいる人のものであり、人は与えられた世代の中で過去を反芻し未来に向かった自分の存在をする投影。作家として崔は自分の世代を時間に投射し、時間を自分の世代に投射する役割を自ら担う。このために、崔は時間の構造を作品の中で可視化する独自の言語体系を作る。例えば、それぞれの存在、物ごとを一つ一つ隠喩の言語に変え、それらの関係を新たに解明することだ。崔にとって森、木、草、星、道、水滴、虫たち、動物たちのような自然の存在とそれらの場所だ。それぞれの対象はそれぞれ違う時間を行き来する。古い桜の木の時間とその下を歩いて通り過ぎる人間の時間は、全く違う。宇宙と世界の時間の中で、これらの存在するものの時間は刹那に過ぎない。それにもかかわらず、すべてのものは自分の時間を他者の時間に投影する。

塩と灰、然して鹿 それらの上を流れる空の星があり、メトロノームのように時間を区切る小さなしずくの落ちる音はその空間に響く。The Oldest Story of Todayは、これらの要素と時間の無限な循環というプロットの中で作り出す叙事的な構造について考えさせられる。塩と灰は世界の二つの側面を表している。鹿はそうした世界を見つめる視線の主体といえる。空の星は世界を支える時間的循環の記号だ。水滴の音は現在の各瞬間を分ける個別フレームを呼び起こす。ここではこれについて述べようと思う。

# MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN  
tel:+81-(0)3-6450-2334 fax:+81-(0)3-6450-2335  
www.misashin.com info@misashin.com

生命は海から来た。海から生まれた塩は人間にとって最も古く、必要不可欠な食品であり、最も重要な資源である。人間の体に最適化された生理食塩水には0.9%の塩分が含まれる。塩の不足は電解質不足による脱力と脱水を起こし、人間を死に至らしめる。例えば、北ヨーロッパでは塩分を獲得するため、貿易と戦争、支配と独占が繰り返された。塩は生命維持に不可欠であると同時に財源でもある。韓国語の塩は「白い金」という意味に解釈される。財源としての重要性を持つ塩の歴史は、今日の「サラリー」の語源であるラテン語のサラリウム(salarium)からも知ることができ、塩の産地とローマを結ぶ街道もやはり「サラリア(salaria)」と呼ばれた。塩に課す税金はフランス大革命の主な原因の一つであり、インド独立運動の要因も英国の塩専売政策に抵抗したガンジーの「塩の行進」だった。中国では2,700年間に渡って塩の専売制は存続し、塩は中国歴代王朝の最も重要な税源であった。中国の塩の専売制度は税率の低下により2017年に廃止され、日本でも1997年に廃止された。中世以降、財源の中心は香辛料、銀、金、そして基軸通貨と順に席を譲ったが、塩は依然として生命と浄化という卓越した価値を持つ。カトリック教では典礼に聖水として塩水が用いられる。マタイによる福音書5章にある「地の塩、世の光」は世の中で人間が生きていく目的について説明するための表現だ。

現在は灰に覆われている。それが情熱であれ暴力であれ、犠牲と英雄物語であれ、虐殺と炎の記憶であれ、現在は過去に起きた炎の灰で覆われている。灰は風によって散らばったが、その跡はかつてそこに火が存在したことを物語っている。ジャック・デリダは次のように述べた。：

ジャック・デリダは著書「Feu la Cendre」で灰について以下のように述べている。われわれは灰について何も知らない。取り返しがつかないほどばらばらになるだけだ。それは誰にも保存されず、残らず、戻らないことの失われた記憶だ。灰があることは火があったことを意味する。灰は犠牲と贈与を指し、その痕跡は灰自体を称える場となる。

デリダは「そこに灰がある(il y à la Cendre)」、「再び灰があると言う(il y ala Cendre)」言った。灰があった場所が残っていないからだ。「灰」は記憶できないもの、消えてしまったもの、残っていないもの、禁じられたものの痕跡であり、「灰」はそれ自体が灰の痕跡であり、そこに火があったということの痕跡である。灰について私たちが知っているのは、灰という事実だけだ。散らばってなにも残らない。

塩と灰はそれぞれ世界の両面性を表している。塩は生命/浄化、そして灰は火/残滓。それは今日我々が直面している災難と戦争、情熱と懺悔、犠牲と記憶。

# MISA SHIN GALLERY

3-9-11-1F, Minamiazabu, Minato-ku, Tokyo 106-0047 JAPAN

tel:+81-(0)3-6450-2334 fax:+81-(0)3-6450-2335

www.misashin.com info@misashin.com

崔は2011年4月にイタリア南東部プーリア州の海辺にある村のオリーブ農園で1日24時間1分に1カットずつ計1440カットの空の写真を撮影する「Puglia Sky Project」を行った。長い歴史を通じて多くの民族に支配された試練の歴史を持つ土地の上を、相変わらず覆っている夜空と海の黎明を記録したのだ。本展覧会では日没と夜明けにそれぞれ9分間にわたり、刻々と変化していく空を撮影した計18枚の写真を見ることができる。空に対する崔の関心は2012年、ソウルのKukje Galleryで開かれたVerse展にさかのぼる。夜空の星はそれぞれ違う時間の記号だ。ある星の光は136億年前の宇宙の起源から始まり、ある星の光はわずか数光年を経て私たちの網膜に到達する。異なる巨大なタイムゾーンの光が広がる空と、その下で異なる世代の時間を生きるものたちの世界へ対応した崔の言葉なのだ。

鹿は犠牲者であり媒介者であり、神的存在でもある。北東アジアの古代文明では、鹿は王と聖職者の象徴として現れる。鹿の角は自然の中でも天へ伸びる霊媒の道具と見做される。スキタイから朝鮮半島に至るまで、冠デザインには鹿の角が施され、シャーマンたちは鹿の角でできた祭冠をかぶってシャーマンの儀礼を行う。「もののけ姫」の「獅子神」は想像上の存在だが、自然を喩える存在という点でそのイメージを思い浮かべることができるだろう。ギリシア神話のアクタイオンは、神（ここでは森と狩猟の神であるアルテミスである）の存在を盗み見たという理由で鹿に変身する刑罰を受けた。彼は間もなく自身の猟犬にかみ殺された。アクタイオンは、見てはならないものを見た罪で罰を受けた視線の犠牲者だ。彼の原罪的な視線を通じて姿を現した世界と自然の秘密は、私たちにまで伝わってくる。金色の鹿の脚は資本主義に汚された精神性を意味しているようだ。それでもやはり、視線は彼自身であり、自らの命をもって責任を負わなければならないという神話的で循環的な世界観を物語っている。

The Oldest Story of Today は崔在銀の世界観を圧縮したものと言える。災難と戦争の時間を生きているわたしたちの今日を、今日以外に何と呼ぶのだろうか。今日はただ私たちに与えられているものであり、それと同時に永遠に到来するものでもある。それは塩のように生々しく、吹き散らされる灰のように何も残さない。この「今日」は皆の記憶の中に刻まれるだろう。